

吉田栄三自伝〈摘録〉

初代吉田栄三／談

鴻池幸武／記

〈出典：「吉田栄三自伝」相模書房、昭和13年11月〉

この時〔編注：大正四年十月二十三日初日御霊文楽座所演『仮名手本忠臣蔵』通し上演〕、新しい試みとして、八つ目の「道行」の中に、引抜きに、常磐津の「柱立万歳」を入れました。これは、東京から毎月来られる踊りの師匠を越路さんのお内儀さんが心安く、文五郎さんと私は、人形を持って越路さんのお宅で、四、五日稽古して頂きましたが、「間」の勝手が違うので、何遍も何遍も演り直し、二人共へとへとになりました。又、太夫さん連は、これも越路さんのお宅に持って居られる〔編注：常磐津〕林中さんのレコードで稽古して居られましたが、この林中さんの常磐津が実に結構なもので、その面白さは今でも耳に残って居ります。この引抜きは、お客様に大変喜んで頂きましたが、「伊勢さんの引き合わせ」の次に入れたのです。